

解説『憤れる白い鳩：二〇世紀台湾を生きて』

藤目ゆき

本書は、1998年に台湾で出版された周芬伶『憤怒的白鴿—走過台灣百年歷史的女性—』（元尊文化、台北市）の全訳である。

著者の周芬伶は台湾屏東県潮州鎮出身の文学者で、東海大学中国文学部で副教授をつとめている。散文集に『周芬伶精選集』、『汝色』、『恋物人語』、『絶美』、『熱夜』、『花房之歌』など、小説集に『影子情人』、『浪子駁女』、『世界是蔷薇的』、『姊妹向左轉』、『母系銀河』など、児童文学作品に『醜醜』、『小華麗在華麗小鎮』、『藍裙君子上的星星』など、文学論に『鮑異—張愛玲與國文學』、『孔雀藍調—張愛玲評傳』などがある。中山文藝獎、中國文藝獎章、吳魯芹散文獎、吳濁流小説正獎など多数の賞を受賞している。『春天的我們』など劇作もある。

『憤怒的白鴿』は周芬伶の作品群の中では珍しい、オーラルヒストリーの著作である。周芬伶が女性の口述収集に取り組んだきっかけは、日本植民地統治時代の文学作品を授業で扱う中で、学生たちがこれらの作品を読み込むことができないでいることに気づいたことだったという。半世紀ほどしか時を隔てていないにもかかわらず、そこには過去に対する理解を妨げる「超えられない壁」があった。口述収集は、「あの時代を取り返しに戻る」試みから始まったのである。「百年来の百人の女性」の口述を記録しようという初期の大望こそ果たされなかったが、本書に収録された六人の物語には台湾の歴史や社会の諸相がそれぞれの女性の体験から語られており、20世紀を生きた女性が口述する台湾現代史になっている。

6人の女性たちを簡単に紹介しておこう。

李耐（1916年生）は、台湾で最も著名な作家の一人というべき龍瑛宗（1911～1999）の妻である。龍瑛宗の日本語による小説「パパイヤのある街」は、1937年日本の総合雑誌『改造』の懸賞小説（芥川賞に並ぶ文学賞）に入選した。小説に加えて詩歌、散文、評論など彼の作品は400を越え、唯美的でありながら社会洞察に秀でた作風が高い評価を得た。が、李耐の語りは「偉大な作家を支えた妻」による夫自慢でもなければ内助の美談でもない。浮きぼりになるのは相互に理解し合うことのない夫婦の憂鬱な関係、「男性作家の創作活動が活発になればなるほど、妻の生命力が押さえつけられ変形していく様子」（周芬伶）なのである。

許金玉（1921年生）は人力車夫の家庭に生まれた。母親は四男四女を生んだが、家の貧しさの故に、許金玉をふくめ女の子は皆、養女にやられた。小学校卒業後14歳の時から工場で働くようになり、生母が9度目の産褥で他界すると、許金玉が実家の弟妹の面倒をもみた。光復後、彼女は親の勤める婿養子を迎えるよりも自立したいと希望して郵便局に就職した。郵便労働者の労働組合の女性代表として活躍し、1948年11月上海で開かれた全国第五回郵便局労働者代表大会にも参加、翌1949年には台湾初の公務員による街頭抗議デモを最前線で指導した。1950年3月共産党の秘密組織に関与した容疑で逮捕され、公開審判もなく上訴も許されない秘密裁判によって有罪を宣告され、15年間投獄された。釈放後も監視が続き、「大きな牢屋から小さな牢屋」に変わっただけだったという。

イースー（1925年生）は台湾中央部の山岳地帯に暮らす原住民族ブヌン（布農：Bunun）族の女性で、

夢のお告げと祈祷によって病いを癒し人々を救済する巫師である。ブヌン語で生活し、わずかに日本語を話す。高雄県三民崙山の部落で生まれ育った彼女は、14歳で叔父の背に背負われて玉山山系を越えて、花蓮県の玉里に嫁いだという。玉山は富士山より標高が高く、台湾を植民地化した日本人が「新高山」と呼んだ台湾最高峰である。ブヌン族は精霊信仰が厚い。巫師であった夫について仕事を始め、夫の生前は2人で花蓮県境から台東県境まで東部山区の各部落を廻り、この仕事だけで生活した。夫の死後、自分も歳をとったと感じてからは、次第に人の依頼を受けることを主とするようになった。祈祷は心身を消耗する重労働だが、人々を救う巫師の仕事为天職として奉仕してきたという。

黄家瑞(1926年生)は6人の中で唯一人の外省人である。上海の名家・黄家の出身で、作家の張愛玲は従姉妹にあたる。張愛玲は日本占領下の1940年代の上海を代表する作家で、2人は子ども時代をいつも一緒に過ごした。張愛玲が描いた阿片や畜妾に彩られる頹廢的な上海上流階級の生活は、黄家の生活の素描でもあった。張愛玲は王兆銘内閣の高官胡蘭成と結婚、日本敗戦後に離婚するが、中華人民共和国成立後には胡蘭成は香港、後に日本へ、張愛玲は香港へ脱出した。黄家瑞は、国共内戦が共産党の勝利に帰す直前に上海から台湾へ移住している。そのとき乳児であった次女が、台湾の有名女優になった張小燕である。本書に序文を寄せた楊渡は、「黄家瑞の話はまるで外国人居留地たる上海の婚姻物語の縮図のようで、ただその歴史の舞台が台湾に移されたというだけである」と指摘する。

馮守娥(1930年生)は、光復を迎えたときはまだ高校在学中であった。光復後、多くの学生が台湾の祖国復帰に感激し民族意識に燃えて中国語や新中国の思想を学習し、台湾の未来を模索するようになった。子どもの頃から植民地民族の苦難や女性が受ける抑圧を憤り、国家・社会の問題を考え平和を希求していた馮守娥もまた、同級生と「読書会」を開いて議論したり、国際女性デーの企画をした。高校卒業1年後の1950年5月、こうした活動が女子学生の「叛乱組織」活動だとされて逮捕され、その後10年間獄中生活を送った。同時に逮捕された兄の馮錦輝は同年10月に処刑されている。釈放後、同じ政治受難者の陳明忠と結婚したが、陳明忠は1972年に再び逮捕された。彼女は理想を堅持し、釈放運動に奔走して夫を死地から救い出した。

楊秀卿(1931年生)は稔歌という台湾の伝統歌謡を歌う芸家で、1989年には秀でた民俗芸能の伝承者に贈られる薪伝賞を受賞した。後年にこそ芸術家として内外で高い評価を得ることになったが、幼くして失明してからの人生は辛酸に満ちていた。芸能で身をたてることができるようにと養女に出され、厳しい修行を重ね、日本時代には街頭や宴席で歌った。光復後も台湾各地を巡回して歌う身を落ち着けることのない生活で、同じ歌い手の夫との間に旅先で6人の子どもが生まれたが、6人とも人に育ててもらわねばならなかった。街頭の客寄せや地方巡廻が法的に規制されるようになった後、ラジオ放送で人気を博した。暮らしが安定したのはすでに老境に入ってからだったという。

以上の6人の女性たちは、芸家、作家夫人、上流階級の家庭婦人、原住民族、労働者、知識人、といった多様な階級・階層に属し、原住民、福健省系(ピン籍)、漢民族(客家)という多様なエスニシティ、相異なる職業と価値観を持って、波乱に富んだ人生を生きてきた。

周芬伶が意図したとおり、6人の物語はそれぞれに結びついて20世紀台湾の女性史像を浮かび上がらせている。そして20世紀初期に生まれた彼女たちの口述は、前世紀末に生まれた母親の回顧や母親の世代とは違う自分の新しい生き方の模索を含み、自ずから20世紀の女性の役割や地位の変遷を映し出す。

日本植民地支配下の台湾女性は、女兒を養女に出す慣習、周囲に決められる結婚、子沢山、嫁として働き通しの生活といった女性であるがゆえの苦勞と共に、「二等国民」として日本人の搾取と収奪を受けるといった民族的苦難の中にあつた。日本時代の公娼や日本軍の「慰安婦」であつた台湾女性の口述は本書に含まれていないが、本書の各所にも様々に語られた女性の低い地位、貧しい生活、民族的抑圧の延長線上に、身を

売る生活に追い込まれた女性や日本軍の性奴隷にされた女性の人生もあった。日本植民地支配からの解放は、台湾民衆にとって歓呼して迎えた「光復」であり、女性史の重要な転換点ともなった。祖国中国の新思想を吸収し、新しい台湾の建設や女性の解放への漲る情熱をもって立ち上がった許金玉や馮守娥は、自立した女性として時代の先端を進み、未来を拓く新しい生き方を始めていた。

ところが覚醒し変革へと向かおうとした女性たちが被った政治的迫害は、とほうもなく激しく残酷であった。陳儀政府の樹立から2・28事件、さらに蒋介石の台湾亡命から戒嚴令の布告、それに続く50年代白色テロルといった台湾現代史が女性の視点から語られることは稀だが、許金玉と馮守娥はそれぞれこうした激動の時代の貴重な生き証人である。

1949年、中国大陸の国共内戦が大衆の支持を得た共産党の勝利に帰す一方、国民党は台湾を支配下に置いて戒嚴令を布告し、「懲治叛乱条例」や「戦乱時期検肅匪謀条例」などを公布して、国民党政権の維持に不利益とみなす人々を恣意的に逮捕、拷問し、秘密裁判によって処刑する独裁国家体制を構築していった。東西冷戦が激化し朝鮮戦争が勃発すると米国は第七艦隊を台湾海峡に派遣して反共の砦たる台湾の国民党政府と共同防衛条約を締結した。朝鮮戦争時代、日本は米国の朝鮮戦争遂行のための基地となり、米国の反共戦略に堅く結びついた。サンフランシスコ講話条約と日米安保条約が発効した1952年4月28日には日台条約を調印した。日本が中華人民共和国と国交を正常化するのはようやく1972年のことである。台湾民衆に支持を受けず社会基盤の脆弱な国民党政権を支えたのは、このような米日からの支援であった。

国民党政権による暴力は激烈なものとなった。秘密裏に行使された50年代白色テロルの全容は未だ究明されていないが、政治受難者は約8,000名から数万人が懲役刑に処され、約3,000名から5,000名以上が銃殺されたと見積もられている。馮守娥によれば、彼女自身が知り得ただけでも、許金玉の人生に決定的な影響を与えた計梅真を含めて18人の女性が死刑に処せられ、ひかえめに見積もっても200名前後の女性が政治囚として投獄されていた。女性受刑者は監獄の便器に衝立がないため、用便さえも男性看守から丸見えであった。男性看守から覗かれるので、暑くても服を脱いで眠ることもできなかった。幼い子どもを連れて入獄した女性も少なくなく、拷問によって胎盤早期剥離から命を落としかけた女性もいた。また、直接的な政治受難者ではなくとも、夫や兄弟、父親の政治的受難によって不断の監視と社会的迫害を受け、経済的困窮にも追い込まれた母、姉妹、妻、娘たちの悲惨は想像を絶するものであった。彼女たちは、家族が政治犯だということを秘匿しなければ社会的な迫害と排斥を免れないため、苦しみや悲しみを表に出すことができず、「泣くことさえも許されなかった」という。旧中国の上流階級や国民党関係者にとって旧社会の特権を維持できる安楽の土地となった台湾は、これら政治受難者たちにとって恐怖の牢獄と化した。

平和で民主的な社会を希求する民衆が国民党独裁体制の下で自由を剥奪され、沈黙を強いられた歳月はあまりに長きにわたった。秘密裁判の最後の受難者となった陳明忠が釈放されたのは、国民党政権が布いた戒嚴令が38年間を経てようやく解除された1987年なのである。周芬伶が授業の中で逢着した、日本植民地時代と現在という二つの時代の人間に互いを理解できなくさせてしまう「怪物」とは、日本から解放されて中国に復帰した台湾を大陸と分断し台湾を白色テロルの島と化した政治、そして平和と民主的社会的建設を熱望した民衆の真実を隠蔽・歪曲することで成立した社会ではなかっただろうか。戒嚴令布告以降の民衆史の空白が、「二つの時代」を遠く隔ててしまったのではないだろうか。

台湾は1987年の戒嚴令解除以降、女性運動や労働運動の高揚、労働者政党的創立、政治受難者の会の発足と、民衆が沈黙を破り社会運動が活性化する新しい時期を迎えた。本書に許金玉や馮守娥のような政治受難者の口述をふくむ図書が出版されていることも、楊渡が前書きの冒頭に女性労働者の闘いに言及していることも、こうした台湾の民主化を反映している。失われていた民衆の歴史が修復され、埋もれていた女性の

声が聞かれ始めた、そのような民主化の空気のなかで本書は編まれた。

が、馮守娥ら政治受難者たちは、戒嚴令解除以後の民主化を過大に評価することはできないという。白色テロルの恐怖時代をもたらした兩岸の分断は東西冷戦が終わった今日になお解消せず、冷戦の前線であった台湾海峡には米国の介入と軍事的緊張が続いている。1998年、「戒嚴時期不当叛乱匪諜審判補償条例」が戒嚴令時代の政治受難者に対する補償法だとの名目で制定されたが、「叛乱犯あるいは匪諜」と政府が認定する者を排除する条項を含むなど、政治受難者当人たちにはとうてい受け入れ難いものであった。2・28事件や50年代白色テロルをもっぱら大陸から来た外省人による台湾の内省人に対する暴圧と表象することで、これが台湾における中国国共内戦とその継続であったという側面は捨象され、大陸と台湾の敵対、分断、分離のイデオロギーにからめとられる。その一方、社会主義を志向し兩岸の統一を願ってきた人々は不可視化され、処刑が当然の「叛乱犯あるいは匪諜」のまま留め置かれてしまう。

私たちは馮守娥らの声をどう受けとめるべきだろうか。

日本人である私たちの目に入りやすい近年の台湾は、「癒しの楽園」で、「中国と違って親日的」で、「日本ブーム」が起き、「若者の間に哈日族（ハーリーズー）（日本大好き族・日本かぶれ）が出現する」ような台湾であり、「独立を望んでいる台湾」である。が、それらの台湾像は台湾の一部でしかない。

本書が、巷に流布されている台湾像とは別の台湾を発見する一つの機会になり、台湾と日本の女性どうしが皮相な友好ではなく歴史認識を分かち合った深い相互理解に基づく関係を築いていく一助になれば幸いである。

本書の翻訳は北原恵さん、近藤久美子さん、河本美紀さんにお願ひしました。馮守娥さんは本書の出版計画を初めから終わりまで援助していただきました。本書と周芬伶さんを紹介して下さったのも馮守娥さんであり、さらに原稿全体をチェックして翻訳上の助言を下さり、解説を書くために必要な資料と情報を提供して下さいました。また本書の刊行のために、明石書店編集部兼子千亜紀さんと編集実務で田中元次さんにお世話になりました。心から感謝申し上げます。

2007年3月31日